「男、突っ走る！」

第97回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（24）　『オフィスツリーイン』代表
山中　敦夫（44）　劇団主宰者
山森　直海（19）　『スリジェネ』メンバー
阿川　緑（30）　『スリジェネ』メンバー
北　まひる（22）　ミュージカル出演者
月島　藍那（22）　ミュージカル出演者
大森　泰明（58）　ミュージカル出演者
林　亜里沙（12）　ミュージカル出演者
赤澤　隆太（11）　ミュージカル出演者
辻松　翔（11）　ミュージカル出演者
大坂　理央（12）　ミュージカル出演者、美央の妹

1　南公民館・大会議室

N「お盆が明けて間もなく、正式な配役が決まり、『神様が願うまで』の稽古が本格的に始まりました」

それぞれ台本の読み合わせをしている出演者たち――その中にいる緑、まひる、藍那、泰明、亜里沙、隆太、翔、理央。

と、雅也が忍び足で入ってくる。

雅也「お疲れ様です」

隆太「うっちー！（と抱き着いてくる）」

雅也「おお、りゅーた。お疲れ」

まひるが側までやってくると、

まひる「お疲れ様です、うっちー。今日は遅いんですね」

雅也「仕事の打ち合わせがあってね。ヤマさんには、遅れて参加するって伝えてあったから。あれ、ヤマさんは？」

まひる「今、隣の部屋で場面稽古してます。ナオちゃんとゆりえちゃんと、女子高生役

チームのみんなが。あと、ゆーさく君も。
私たちは台本の読み合わせで、こっちの部屋を使うことになって」
雅也「そっか。確か今日、欠席者もいたよね。
（と書類を取り出すと）えっと翔子さんと、美穂子さんと千世親子、あと洸さんか」
まひる「うっちーもそうですけど、皆さんお忙しい人ばっかりですもんね」
雅也「このメンバーで同じ舞台に立てるのが奇跡に近いわ。（と隆太に）りゅーた、ちゃんと台本読んでる？」
隆太「うん」
藍那がやってくると、
藍那「あのうっちーさん。今日、アンサンブルのキャスティングが決まったんですけど」
雅也「うん」
藍那「（台本を見ながら）私とうっちーさんは、この店の行列に並ぶカップルの役になりました」
雅也「カップル……？　俺と藍那が？」

藍那「ヤマさんから、そういうキャスティング だって言われて。うっちーさんが来たら、そう伝えておいてほしいって」
まひる「良いですね、うっちー。藍那ちゃんとカップル役なんて」
雅也「バランス悪すぎでしょ。これじゃ、『美女と珍獣』だよ。珍しい獣になっちゃうよ、俺。まあでも決まったからには、やるしかないもんね」
藍那「よろしくお願いします」
雅也「いえいえ、こちらこそ」
緑「うっちー、ちょうど良いところに来た。読み合わせ、代役やってくれない？」
雅也「はい、分かりました」
まどか「ミドリさんは、ナオちゃんのお母さん役ですもんね」
藍那「それにしても、ナオちゃんもすごいですよね。台本見ると、全場面にほとんど出ずっぱりなんですもん。稽古もいろんな人とやらなきゃいけないと、大変でしょ」

雅也「まあ高校演劇やってきたし、『スリジェネ』のメンバーの中では、やっぱり一番演技力があるからね、ナオは。（と藍那に）じゃあ、またアンサンブルの稽古の時、よろしく。（と緑の元へ行きながら）お待たせしました」

まどか「うっちーも、運営とメンバーリーダーやったり大変だね。仕事もあるだろうし」

藍那「確かうっちーさんって、脚本と広告制作やってるんだよね？」

まひる「そうそう。前に少しだけ話したんだけど、地元のフリーペーパーとか、あと脚本の仕事もちょくちょくやってるみたいよ」

藍那「へえ」

×　×　×

台本を読み終わる雅也、緑、泰明。

雅也「すいません。ナオほど上手くないもんですから」

泰明「いやいや、そんなことないよ。うっちーは、台本を台本ぽく読まないのが良いね。

ちゃんと自然の会話になってるよ」
雅也「本当ですか？　ありがとうございます」
緑「まあうっちーも、『スリジェネ』で経験積んでるもんね」
雅也「結成から一年近く。でも、実際舞台に立つのは今回が三回目ですよ。今年の夏は音響オペでしたし、演劇祭の時は形ばかりとはいえ演出でしたからね」
泰明「大したもんだよ。やっぱり、脚本書いてると、書き手側としてある程度の読解力があるから自然なのかもしれないね」
雅也「そんなことありませんよ。やっさんこそ、もう主人公のお父さんっていう風格があって、こっちも演じやすいです」
緑「釣られて良くなるっていうパターンもあるからね。会話のキャッチボールがちゃんとできるのは、相手とのバランスだったり、片方が上手いとそれに良い意味で引っ張られるんだよ」
雅也「じゃあここは、ミドリさんとやっさん

っていう経験豊富なお二人と一緒にできたからですよ」

と、山中が入ってくると、

山中「はい。じゃあ、今から一時間休憩撮ります。あの時計で五時四十五分から始めます」

一同「はーい」

2　同・表

自販機でジュースを買っている雅也と亜里沙。

雅也「どう、アリサ？　稽古の雰囲気はなれた？」

亜里沙「うん。楽しいよ」

雅也「そっか。りゅーたのお姉さんみたいになってるね。確か、小学校同じなんだよね？」

亜里沙「うん。私が六年一組で、りゅーたが五年二組」

雅也「小学校か、懐かしいな。小六ってこと

は……二〇〇七年生まれ？」

亜里沙「私は三月生まれだから、二〇〇八年」

雅也「（驚いて）二〇〇八年の三月……！

ちょうど、小学校の卒業式の頃だな。その時に、アリサがオギャーって生まれてるって考えると、何だか歳の差感じるわ。そりゃそうか、りゅーたが生まれた年が、俺中一だったからね。みんなまだ中学生にもなってないなんて、すごいな……」

亜里沙「りゅーたはいつもあんな感じだから、うるさかったら全然注意してもらって良いってりゅーたのママからも言われてるから」

雅也「オーディションの時は、真面目そうにしてたけど、最近は同級生ってこともあって翔と一緒にいることが多いでしょ。あの二人は、まさに混ぜるな危険ってやつだね」

3　同・大会議室

休憩中。

それぞれ休んだり談笑しているキャス

トたち。
じゃんけんをして遊んでいる隆太と翔
――傍らにまひると理央。
隆太・翔「最初はグー。じゃんけんぽん！」
隆太「よっしゃー勝った！　二連勝」
翔「クッソー。りゅーた、もう一回」
隆太「良いぞ。せーの」
隆太・翔「最初はグー。じゃんけんぽん！」
翔太「よし勝った！」
隆太「ああ、負けた」
まひる「三連勝なれなかったね」
隆太「ああ、悔しい」
理央「私もやる」
隆太「よし、じゃあ俺と勝負だ」
と、雅也と亜里沙が戻ってくる。
雅也「（まひるに）何、じゃんけん大会でもやってるの？」
まひる「りゅーたがやろうって言いだして」
亜里沙「（呆れ顔で）いっつも、これなんだから」

隆太・理央「最初はグー。じゃんけんぽん！」
理央「勝った！」
隆太「また負けた……」
雅也「りゅーた。俺とやるか」
隆太「やる！」
翔「うっちー勝てるの？」
雅也「絶対勝ってやる。よし、行くぞ。せーの」
雅也・隆太「最初はグー、じゃんけんぽん！」
雅也「よっしゃー！」
隆太「うわぁ、うっちーに負けた」
まひる「大人げないですよ、うっちー」
雅也「勝負に大人も子どもも関係ないよ」
まひる「それ言っちゃうんですね」
雅也「え、忖度してりゅーた勝たせなきゃダメかね？」
まひる「そこはやっぱり、大人ですから」
雅也「理不尽だね。（と隆太の頭を撫でて）
でも、りゅーたが可愛いからいくらでも負けてあげる」

隆太「うっちー！（と抱き着く）」

雅也、隆太を抱っこする。

4　コンビニ・駐車場

山中と緑が話している。

山中「ミドリさんが演出助手に入ってくれて助かりました」

緑「いえいえ。夏の公演のときを考えたら、いくらでもやりますよ」

山中「これだけの規模のミュージカルの演出は俺も初めてでしょ。場面ごとの稽古になると、どうしても待ち時間が多くなって、時間を無駄にしてしまうような気がして」

緑「稽古日数、足りてます？」

山中「全然。国枝さんにも相談して、せめて主人公のナオだけは、何人か人を集めて個人稽古を平日の夜にでもしたいなと思ってるんです。でも、予算のこともあってか、国枝さんがあまり良い顔しなくて」

緑「思えば国枝さんって、ほとんど舞台の出

演経験ってないんですよね。出る側の大変さ、分かってないんじゃないんですか？
そもそも今回のスケジュールだって、あまりにもタイトすぎますよ」
山中「まあ市民ミュージカルっていうのもありますし、市役所との都合もありますからね」
緑「私、『神様が願うまで』が終わったら、『スリジェネ』辞めようと思ってます」
山中「そうですか」
緑「とてもじゃないですけど、国枝さんのペースには合わせられません」
山中「なるほど……」

5　カラオケ店・全景（夜・数日後）

6　同・一室

雅也、山中、直海が台本を見ながら稽古をしている。

山中「はい、オッケー（と手を叩く）」

雅也「ナオすごいね」
直海「何が？」
雅也「今ので三回目なのに、もうほとんど台本見てないじゃん」
直海「元々台本読んでたし、最初の二回で、もう体に染み込ませるようにして覚えてるから」
雅也「すごいな。やっぱ経験者は違うわ」
山中「うっちーのポジションも重要だぞ。代役で入ることで、演技力が鍛えられることだってあるんだから」
雅也「まあ、とてもメインどころの皆さんのような演技力なんてないですけどね」
山中「でも、この一年近くで、うっちー大分上手くなったよ。声も大きくなってきたし」
雅也「そうですか？」
山中「知り合った頃なんか、ヒョロッとした声だったじゃないか」
雅也「分かんないですよ、自分じゃそんなこと。まあ『スリジェネ』のリーダーとして

復帰した以上は、頑張らないといけませんからね。他のメンバーや、キャストの皆さんの手前もありますから」

山中「『スリジェネ』の今後の活動って、何か決まってるのか？」

雅也「さあ。そういう話は、今は全部国枝さんが決めてますから」

山中「いずれ、国枝さんに話が行くと思うけど、ミドリさん、これを機に『スリジェネ』を辞めるってこの間の稽古の時に話してたよ」

雅也「まあ、Tシャツの件もありましたし、夏のミュージカルの時のパンフレットの名前掲載拒否事件もありますからね」

直海「あったね、そんなこと」

山中「他のメンバーも、もう国枝さんにはついていけないかもしれないな。俺やうっちーにいろいろ言ってきたから、メンバーたちは国枝さんはもっとすごい演出ができるって期待してたんだよ。でも、いざ蓋を

開けたら期待外れだったみたいでな。特に演劇経験のあるショウやむぎやナオは、なおのこと」

直海「……」

雅也「……」

山中「運営の状況を理解してたコウタやとみーがいなくなったのも、ちょうどタイミングだったのかもしれない。きっとマリエもレイナも、このままフェードアウトするんじゃないかな」

雅也「メンバーがいなくなったら、活動もできなくなりますもんね。『スリジェネ』そのものが自然消滅する可能性もあるってことでしょうか？」

山中「復帰したばかりのうっちーにこんなことと言うのは何だけど、結局『スリジェネ』はプロになるための通過点なんだよ。本当にプロになるんだったら、コウタやとみーみたいに関東に行くことが一番早いだろう。もちろん俺みたいに、東京で活躍したって

知名度も何もないまま故郷に戻ってくるパターンもある。現にここで活動したって、プロの業界人は国枝さんのことを知らないだろう。だって国枝さんや、元々業界の人間じゃなく、あくまで市民映画や市民ミュージカルといった、言わば素人相手にしてるからな。プロになりたいって本気で思ってるんだったら、ここにいちゃいけないんだよ」

雅也「……」

山中「うっちーは実際にプロの現場で脚本書いた経験はあるかもしれないけど、それだってまだまだ知名度はないだろ。脚本家の木内雅也って言ったって、誰？ってレベルなんだから」

雅也「それは、もちろん実感してます」

山中「だからこそ、『スリジェネ』が無くなるのも時間の問題かもしれないな」

直海「……」

雅也「……」

7　同・駐車場

雅也と直海が歩きながら話している。

直海「うっちーはさ、いつまで『スリジェネ』にいるつもりなの？」

雅也「いつまでか……どうかな……」

直海「今日のヤマさんの話じゃないけどさ、もっと上に行くんだったら、今の『スリジェネ』のクオリティじゃダメだと思う」

雅也「……」

直海「私もね、これが終わったら『スリジェネ』辞めようと思ってる」

雅也「ナオ……」

直海「さっきは言うタイミングなかったから言わなかったけど、むぎはこの公演が終わったら辞めるって言ってたよ。地元の劇団や大学の演劇サークルのほうが、クオリティの良いものが作れるからって」

雅也「そう……」

直海「私ね、三月に今の仕事辞めて、四月か

ら東京行こうと思ってるの」
雅也「東京……？」
直海「声優の養成所に行くの。私、声優になりたくてさ」
雅也「そうだったんだ」
直海「今年一年仕事してるのは、東京に行くための上京費用を稼ぐためなの」
雅也「そっか」
直海「うっちーはさ、脚本の仕事もやってるから、これからもっと良い仕事相手が見つかると思うよ。何も国枝さんに固執することはないんじゃないかな」
雅也「……」
直海「ヤマさんも言ってたけど、国枝さんはプロの現場を経験してない。だから、経験値で言えば、うっちーのほうが上だって思ってるよ、私は」
雅也「……」
直海「言い方悪いけど、市民映画や市民ミュージカルのレベルでずっとやってたら、い

つまで経ってもプロには近づけないと思う。
そりゃ、『スリジェネ』に入ったことで、今回みたいなステキな作品の主役もさせてもらえたし、とみーたちと一緒にバンドもできた。プロの現場で脚本を書いたことのあるうっちーと出会えたことも、『スリジェネ』に入ったから。でもだからって、いつまでもこの環境にいたら、成長できるものも成長できないような気がするの。私も、夏のミュージカルの時、正直国枝さんの演出力の無さを実感した。ミドリさんが、当日パンフレットに演出助手として名前を記載したくないって理由も分かる。私にとっても、あのミュージカルはその程度のクオリティだったの。あれこそ、黒歴史だって言っても良い」

雅也「そこまで言うレベルだったんだ……。俺は途中から稽古に合流して、音響オペやるのに精いっぱいだったから、作品そのもののクオリティを気にする余裕もなかった

けど」

直海「別に、うっちーは運営も兼任してるから、このまま『スリジェネ』に残るっていう選択肢もあるから、これ以上は何も言わないけど、ただうっちーは、もっと活動できる場所があると思う。これからどうするか、一度よく考えてみたら？」

雅也「そうだね……」

直海「じゃ、また今週末の稽古で。お疲れ」

雅也「うん、お疲れ」

と、それぞれ車に乗り込む。

8　木内家・雅也の部屋（夜）

雅也が台本を読んでいる――机に台本を置くと、棚に並べられたファイル資料を見始める。全て『スリジェネ』の会議資料などが丁寧にまとめられている。

N「ヤマさんやナオの考えが頭から離れず、メンバー復帰をしながらも、本当にこのま

ま『スリジェネ』に残って良いものなのだろうかと、僕は思うようになっていました。実際、絶賛稽古中の『神様が願うまで』が終わった後、『スリジェネ』としての企画は何も決まっておらず、毎年地元で開催される『市民演劇祭』に出演できる程の余裕もないため、やはり『スリジェネ』はメンバーたちの脱退により、自然消滅していくものなのではないかという予感がしていました。『スリジェネ』の結成当時から、運営として携わって一年半近く。僕の演劇生活も、まもなく潮時なのだろうと思い始めていました」

つづく